

Katherine K. Merseth. (1991) Supporting Begining Teachers with Computer Network. Journal of Teacher Education. March-April, Vol.42, No.2, 140-147.

Summarized by NAKAHARA,Jun
Graduate School of Human Sciences, Osaka University

要約

インタラクティブなコンピュータネットワークは、初任の教師の導入支援に有望なメディアである。本研究は、Harvard UniversityのBeginning Teacher Computer Network(互いに離れたところにいる初任の教師を支援し指導するためのもの)に参加している39人の初任教師に対して行われた支援の性質とタイプを調査するものとする。

メールによる調査、コンピュータの使用頻度、構造化面接を通してわかったことは、ネットワークは、モラル・サポートを与えるのには有効であったが、カリキュラムのプランニングの技術的サポートを与えることには、全く効率が悪かった。

ネットワークの使用がどの程度容易か、ネットワークが教師の孤立感情をどの程度軽減できるか、ネットワークの提供する環境が安心できて評価のない環境であるかどうかなど、数多くの要因によって、この種のサポートを供与するネットワークの能力が決定していた。

初任の教師はサポートとガイダンス(指導)を必要としている。

孤立の問題などに悩むことが多い。

多くの州では、Teacher Induction program(導入: 初任者研修)を行っている。

不幸なことに多くのinduction programでは、感情面のサポートが不十分

初任者研修の重要性がましたこと、また、学校にネットワークが導入され始めたことによって、新しいInduction Programのかたちが模索され始めている。

注. ちなみに、この論文が書かれたのが1991年であることに注意されたい。この場合、ネットワークといているのは、きわめてローテクなコンピュータと低速のモデムによって媒介されているテキストのやりとり(E-mail・BBS・Forum)のことをいっている。

How Electoronic Networks Work?

Method

被験者

Harvard UniversityのEducation Programを終了した39人の初任教師(Education Programの管理者・大学院生なども参加)

Procedure Used to Communicate

math、science、artなどのカテゴリーの付与されたpublic Spaceとしての

BBSと同時にPrivateなmailも交換できる。ネットワークのメンバーは、public・privateなmailを受信し、自らの教育経験に応じて、group discussionに参加できる。

Data Collection

E-mailを使用したSurveyとホストコンピュータの使用頻度、構造化面接で得られた情報をデータとする。E-mailによるSurveyでは79%から回答を得ることができた。このデータは、他のデータと関係して、被験者自信のネットワークのperceptionを調べるのに使われる。ホストコンピュータからのデータは、使用の頻度と変容をさぐるために使われる。構造化面接に関しては、10人から回答を得ることができた。

Result

コンピュータ・ネットワークは、非人称的で冷たいメディアだとされる傾向がある。本研究の主要なリサーチ・クエスチョンは、初任教師同士をむすんだコンピュータ・ネットワークにおいて、このメディアは「personal」な、また「emotional」な、あるいは「Technical」な各種の支援を与えることに成功しているかどうかということである。

結果は以下の通り

【E-mail Survey & The Frequency of Use】

使用頻度は、参加を促さない限り減っていく。

22%の被験者が毎日使用している。48%は、週に1回から3回、30%の被験者が、一ヶ月に一回から二回。

被験者が必要と思う支援をどれだけ効率的にネットワークが与えているかという問いに関しては、回答で一番多かったものが「Moral Support」であった。授業・カリキュラムプランニング、学級経営の改善、教授技術のshareなど、日常の教育技術をかたちづくる項目に関しては、「Moral Support」よりも有意に低かった。

毎日ネットワークを使用しているものは、他のものよりも有意に、ネットワークから「Moral Support」を得ることができたとし、また同時に教育の原理に関するリフレクションの機会となったことを報告した。

【Follow-up Structured Interview】

構造化面接の結果、コンピュータの機械的な性質は、ネットワークによる教師の感情面の支援のさまたげとはならなかったことを示している。

また、構造化面接の結果、ログオンすれば他者のメッセージにふれることのできるネットワークでは、教師が孤立感情をもつことは少なかった。

Discussion

ネットワークの供与する「Moral Support」に初任教師はもっとも魅了されたが、それではこの種のサポートを供給することに成功したのはなぜか。それはネットワークの使用のしやすさ、ネットワークが教師の孤立感情をどの程度軽減できるか、または、ネットワークがどの程度、教師に安心感を与え、評価されているのではないという感情を与えるかによる。

ネットワークを媒介とした他者との対話は、教師の孤立感情を軽減することに成功した。

ネットワークは、より経験をつんだ大学のスタッフによるinduction programというよりは、初任教師同士による感情支援グループとして機能していた。

今回の実践においては、ネットワーク上において初心者が教職経験者よりも支配権をにぎっていたために、教育技術などの伝承に関してはうまくいかなかった。

- ・技術的な限界も大きく影響しているものと思われる。
- ・また、ネットワークの参加者が多地域にまたがっているため、個人の教授活動の情報を伝えることが難しかった。

【Jun Comment】

アメリカの教師が「孤立感情」をつよくもつことは、Lortieの著作でつとに有名である。教師は学級という「Egg-Crate Structure」の中でひとり悩み、Colleague(同僚)を獲得できないままに、孤独に苦しむ。思えば、現在教師教育の分野で議論されている「共同性」「同僚性」という問題は、ここに派生する。この実践は、初任教師をネットワークで結ぶことによって、この孤立感情を「緩和」することをねらったものである。

1991年の論文であり、その間に相当の技術革新が進んだので、簡単に今の実践と比較はできないが、他者の声にふれることによって、そうした孤立感情が軽減されることは間違いないと思われる。ただ、教育技術の伝承に関しては、うまくいかなかったのは、本論稿のDiscussionに寄せられた原因だけだろうか。そもそも教育技術というものは、そうした支援の仕方、伝承が可能なものなのだろうか。誤解をおそれずさらに言うなら、教育技術を「書くこと」「伝えること」とは可能なことなのだろうか。

それにしても、すでに8年の月日がながれる研究ながら、この時につくられた研究の方法論は、現在の同様の実践でも継承されていることに驚きを隠せない。